

千代金丸の来歴を探る

上間 篤

要旨

千代金丸と称される琉球王朝ゆかりの貴重な刀剣が今に伝世する。史書を参照すれば、この刀の本来の所有者は、三山時代の終焉期に今帰仁勢力を率いた攀安知であったことが判る。ところが、攀安知とその勢力の氏素性の観点から、千代金丸の来歴に言及した論考はいまだ皆無に等しい。興味深いことに、近年今帰仁城跡及びその周辺域から出土した考古学史料には、元朝に仕えて江南地方の経営と治安維持に奔走した西域出自の騎馬軍団との繋がりを反映する文物が数多く含まれている。本稿では、騎馬文化との関わりを傍証するこれらの考古学史料を拠り所にして、片手持ちの拵えを特徴とする千代金丸の来歴の真相に迫る。

An Inquiry into the Origins of Chiyokanemaru

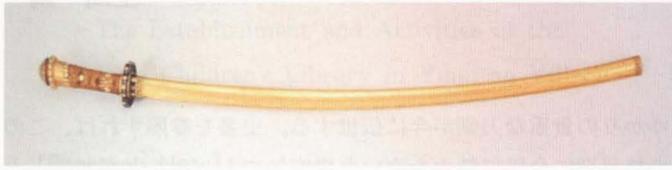
Atsushi Uema

ABSTRACT

There exists an outstanding sword named Chiyokanemaru, which is well known for its intimate connection with the first and second royal families of the unified kingdom of the Ryukyus. However, as history tells us, the sword was originally in the possession of Han Anchi, who once led the medieval militant force of Nakijin prior to the advent of a unified kingdom in Okinawa. Some features of Chiyokanemaru, especially its single-handed hilt and its thin and gracefully curved blade, suggest strongly that the sword has no connection whatsoever with the Japanese art of sword-smithing. Interestingly, the archeological record featuring some major characteristics of the medieval force of Nakijin reveals that the realm of predecessors of Han Anchi in Nakijin retained a certain ethnic and cultural heritage from the Alan Christian cavalry unit serving the Mongolian government in southern China in the Yuan Era. This paper intends to reconstruct a clearer image of the origins of Chiyokanemaru by examining its features from the viewpoint of the archeological finds mentioned above.

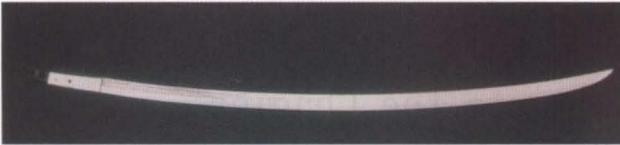
【はじめに】

千代金丸は、沖縄の第一・第二尚氏王統の宝剣として今に伝世するものであるが、蔡温が著した『中山世譜』¹に拠れば、その本来の所有者は三山時代の終焉期に今帰仁勢力を率いた攀



安知であったことが判る。左に紹介する一振りのの刀剣が問題の千代金丸²（後世の命名）である。写真史料でも明らかなように、柄の長さがお

よそ11cmと極端に短いその容姿（総長92.1cm、刀身71.3cm、鞘長77.4cm）³には、それが彎刀であることを除けば、毛抜形太刀⁴及び兵庫鎖太刀⁵といった鎌倉・南北朝期を代表する日本の太刀との類似性（刀装具及びそれにあしらわれた紋様を除く）はいかんとも認めがたい。その一方で、彎刀拵えだけに焦点を当てれば、千代金丸の刀身部（反りの測定値は報告がなく不



明瞭）の反り具合といったものには、鎌倉・南北朝期の古刀に看取される彎刀拵えとの類似性が指摘されなくもない。ところで、千代

金丸の本来の所有者であったことで知られる攀安知は、中世に今帰仁城に起居した武装勢力を率いたことで知られる人物であるが、この人物が生きた時代との関わりで千代金丸の氏素性を探るとなれば、日本の歴史では鎌倉から南北朝期を経て室町時代に至る時代区分、片や中国史においては元朝の出現から明朝初期までの時代背景を視野に入れてことに当たるのが筋であると認識される。以下に、かかる観点に立って、従来謎とされてきた千代金丸の来歴に迫ってみることにする。

【鐔拵え及びその意匠からみた千代金丸】

まずは、千代金丸の鐔拵えの特徴を考察することから始める。下に紹介する二様の鐔は、先に登場するものが千代金丸に装着された鐔⁶で、後のものが鎌倉期を代表する金銅鳳凰宝相華



文兵庫鎖太刀⁷と称される刀剣の鐔である。千代金丸の鐔の場合、その外形上の作りは、日本刀の刀装具という木瓜形の鐔拵えに類似した形状を呈する。かかる形状を呈する鐔の周辺部には、中心部の茎孔を取り囲むようにして、いわゆる菊花紋と称される二種類の花紋及び猪目紋、さらには四葉を透かし彫りにした四体の十字紋（キリスト教との繋がりを示唆する意匠）⁸が縦軸と横軸の線上にそれぞれ配されている。加えて、鐔の右に見えている二体の切羽にも、上述の鐔と同様に、類似の菊花紋と透かし彫りの猪目紋が配されている。



次に鎌倉時代に位の高い武士が佩用したと伝えられる、金銅鳳凰宝相華文兵庫鎖太刀の鐔の拵えをみてみる。左下の史料が示すように、この太刀の鐔の形状にも先の千代金丸の事例と同様に木瓜形の特徴がみてとれる。また茎孔の周りには、

それを囲い込むようにして四体の猪目紋の透かし彫りが配されている。鎌倉期の装飾趣味の反映とみなされるこれらのあしらいには、先に言及した千代金丸の鐺拵えとの共通性が指摘されて興味深い。その一方で、この太刀の鐺に施された装飾意匠には、明らかに千代金丸のそれとは来歴を異にするものもある。この太刀の茎孔の周りにあしらわれている高彫りの鳳凰図がそれである。この種の意匠の来歴については、仏教思想との関わりが指摘されている⁹。さて、これらの鐺拵えに看取される特徴だけに依拠するならば、千代金丸と鎌倉期を代表する兵庫鎖太刀は、指摘した意匠の類似性を仲立ちにして、不可思議な関係で結ばれている間柄にある様相を帯びていると解される。

鐺拵えをめぐるかかる関係はさておき、今しばらく猪目紋と木瓜形の鐺拵えの来歴の問題に焦点を絞って考察を進めることにする。日本の刀剣史に詳しい史料を参照すれば、猪目紋の起源が想像以上に古いものであることが理解される。今日国宝に指定されている刀剣の一つに、



梨子地螺鈿金荘飾剣と命名された、儀仗用の太刀（全長：104.0cm、柄長：21.0cm、鞘長：82.0cm、左の史料参照）¹⁰が存在する。この太刀の作刀は平安時代に遡るが、その柄には高彫りの技法で施した数体の猪目紋が確認される。この事例は、猪目紋の来歴が平安時代の昔にまで遡りうるものであることを示唆する。因みに、飾剣とは、一般に宮中の要人が儀式の際に佩用した太刀を指す呼称であるが、公家社会においては、徳川時代に至っても猪目紋をあしらった儀仗用の太刀が

佩用されていたことが、金梨地塗木瓜紋蒔絵鞘糸巻太刀拵（総長：98.0cm、左の史料を参照）¹¹の名で知られる一振りの飾剣の存在によって証明される。これら二振りの儀仗剣の存在は、猪目紋なる意匠が古刀期の時代から近代に至るまで、日本の公家社会において格別の計らいをもって扱われてきた意匠であったことを裏づけるものとして注目される。



佩用されていたことが、金梨地塗木瓜紋蒔絵鞘糸巻太刀拵（総長：98.0cm、左の史料を参照）¹¹の名で知られる一振りの飾剣の存在によって証明される。これら二振りの儀仗剣の存在は、猪目紋なる意匠が古刀期の時代から近代に至るまで、日本の公家社会において格別の計らいをもって扱われてきた意匠であったことを裏づけるものとして注目される。

一体日本の飾剣にみる意匠拵えといったものは、元来奈良時代に大陸から将来した唐刀の装飾意匠を下地にして発達をみてきた歴史を窺わせるが、かかる経緯を代表するものとしては、正倉院収蔵の金銀鈿荘唐大刀¹²及び聖徳太子の遺愛刀であったことで知られる七星剣ならびに丙子椒林剣¹³と称される儀仗剣が今日に伝世する。聖徳太子（574?-622）といえ、飛鳥時代を代表する政治家ならびに思想家であるが、彼が佩用した儀仗剣や既述の金銀鈿荘唐大刀を彩る装飾意匠に猪目紋及び木瓜形鐺との関わりを示す物証は見当たらない。かかる検証結果を踏まえるならば、鎌倉・南北朝期の古刀を彩る猪目紋や木瓜形鐺拵えといったものは、今のところ平安時代後期から鎌倉時代に至る然るべき時期に発生を見たものであると想定される。

このように鐺拵え及びそれに施された意匠からみた千代金丸は、兵庫鎖太刀や公家の儀仗剣となりがしかの接点を有している様相を窺わせる。とはいえ、かかる要素だけに依拠して千代金丸を鎌倉・南北朝期の古刀の一振りだと見なしてしまえば、その見解にはとてつもない危うさがつきまとうことになろう。それに関しては、後述の内容が詳らかにしてくれよう。

【鋒、鍛え肌、鎬の視点からみた千代金丸】

さて千代金丸の切先の拵えに言及するのに先立ち、あらかじめ鎌倉・南北朝期における日本と大陸との豊かな文化交流の実態が如何なるものであったのかについて少しく触れておくこと

にする。従来日本の中世史研究では、主に南宋文化との関わりの視点から中世の室町文化を理解しようとする試みが成されてきた。ところが近年モンゴル・ウルスに関する研究が進展するのに伴い、日本の中世史に関する歴史認識の歪みといったものが指摘されるようになった。世界史の視点で捉えれば、東西世界が真の出会いを果たし、東西間で豊かな交流が実現するのは、13世紀のユーラシア大陸を席卷したモンゴル・ウルスの出現に負うものであった。人々の自由な往來を奨励し、自由貿易を謳歌した同王朝の体制は、日本においても若き学僧たちに大陸への留学を容易ならしめる契機となった。日本側の歴史認識では、鎌倉幕府と元王朝との関係に言及するにあたり、従来とかく元寇と呼ばれる文永の役（1274年）や弘安の役（1281年）といった歴史的事件がことさらに強調されて扱われる傾向にあった。けれども鎌倉期の日本における大陸への異常なまでの留学熱といったものを鑑みれば、指摘した従来の史観が歴史の実相にそぐわないものであることは明らかである。13世紀に世界の覇者となったモンゴル・ウルスは、宗教に対して極めて寛大な姿勢を貫いた王朝であったことで知られる。宗教に対するかかる柔軟な姿勢は、中国に元朝を創建したクビライにも受け継がれた。クビライが兄の皇帝モンケから中国行きを指示されたとき、彼は子聡と名乗る臨濟禪の僧を政務の顧問に迎えて中華本土の経営に乗り出す。それはさておきモンゴル・ウルスの政務の中枢にあつて臨濟禪の僧侶たちが活躍したのは子聡に始まるものではなかった。モンゴル・ウルスの二代皇帝オゴデイの幕舎には、つとに耶律楚材や粘合重山といった人物らが出入りを許されたが、彼らもまた臨濟門徒の僧侶たちであった。ところで先行研究は、鎌倉時代の日本から元朝治下の中華大陸へ渡った留学僧の実態について、以下のように伝える。

「このあたりの状況を、おもに日本側の史料からデータをあつめた木宮泰彦の労作は、七〇年をへた今もなお、根本からの基礎研究として、依拠すべきものとなっているが、それによれば、クビライの後継者となった成宗テムルから順帝トゴン・テムルまでのおよそ七〇年間において、名のある入元僧は二百二十余人、無名のをあわせると、数百人をはるかに上回るだろうという。さらに現在の中華人民共和国における元代史研究を代表する陳高華が、詩文集をふくむ漢文史料を捜羅した最近の結果によれば、状況は一桁をふやして考えなければならない。」¹⁴

上記の引用は日本からの入元僧について記した内容であることに留意しなければならない。元朝下の中国には、日本から僧侶以外にも多くの船乗りたちが頻りに渡航していたことを考えあわせれば、かかる状況下では、種々の技能者の往來も多分にあったものと考えられ、その中には軍装備品の製作や金工細工に長けた職人なども多く含まれていたと推察される。大陸内部の騎馬戦において威力を発揮した鉄菱や鎖帷子といった軍装品が我が国に将来することになったのは、当時歴史の表舞台とは無縁の存在であった職人集団、あるいは軍事戦略にひときわ関心を示した無名の禅僧らの影の介入によって実現をみたものであったと想定される。織豊時代に先駆ける群雄割拠の時代には、時勢や世情に明るい禅僧らが各地の有力者に請われて政務や戦略の顧問として活躍したことが知られているが、かかる実態は大陸の種々の軍装品が我が国に導入されることになった経緯とも不可分に絡んでみるとみなされる。そもそも鎌倉期に日本から中華大陸へ向かった交易船の船荷は工芸品で占められていたことが知られており、刀剣類¹⁵もその主要な物産の一つであった。日元間の交易をめぐるこのような実態は、当時大陸側においても金工職人の中で日本の刀鍛冶の高度な技に直に触れることのできる機会が往々にあったことを傍証する。であるならば先に考察した猪目紋及び木瓜形鐔の来歴や起源の問題を扱う

にあたっては、かかる歴史的背景を視野に入れた考察もなされてしかるべきであると認識される。論点の飛躍は避けられないが、中欧の一角にチェコの名称で知られる共和国が存在する。面白いことに、彼の国には、猪目紋に酷似したハート形の刺繍紋様を自国の民族衣装にあしらう慣わしがある。中欧社会の伝統衣装に息づくこの種の刺繍紋様が如何なる出自のものなのかは判然としないが、もしもそれを施す伝統に厄払いあるいは邪気払いといった呪術的要素の介在が認められるのであれば、日本の刀装具にあしらわれた猪目紋の出自をめぐる考察にも新たな視点からのアプローチが可能となろう。紹介したハート形の刺繍紋様に関する詳細な情報の入手が急がれる。

さて、千代金丸の切先の拵えであるが、日本刀のそれとの比較検証を可能ならしめるために、あらかじめ後者の鋒の外見上の特徴に言及することにする。下に掲載した写真史料は、作刀家と知られる天田昭次氏の作品の切先部を紹介したものである¹⁶。日本刀の歴史において、刀身



の先端部がこの史料にみるような形に整うのは、平安後期の彎刀の出現に伴うものであったとされる。以後この形態上の特徴は、久しく継承され今日に及んでいる。因みに、鋒の各部位を

呼ぶ名称、すなわち横手、ふくら、三つ頭、小鑄といったものの存在は、日本の刀鍛冶の美意識を顕現するものでもあり趣深い。ところで日本刀の鋒の形状は、それぞれの作りの特徴を捉えて、小鋒、中鋒、大鋒、猪首鋒などの名称で呼ばれる。史料として紹介した天田氏の作品にみる鋒の形状は、中鋒と呼ばれるものに近い特徴を示すものであるといえよう。加えて鋒の呼称の一つに猪首鋒と称されるものが存在するのは、本稿との関わりにおいて注目される。この種の鋒は鎌倉中期の太刀拵えに多くみられることから、先に検証した鎌倉時代の兵庫鎖太刀の鐔にあしらわれた猪目紋との奇しき関係が指摘されて面白い。そもそも鎌倉・南北朝期の太刀拵えに猪ゆかりの諸要素が看取されることに関しては、往時の武士たちが希求し理想としたであろう豪胆さや勇猛さといった精神性との関わりが指摘されてすこぶる興味深い。

下に紹介する写真史料は、千代金丸の切先部を写したものである。この史料が示すように千



代金丸の切先部の拵えには、日本刀に特徴的にみられる横手、ふくら、三つ頭、小鑄といった部位の作りが欠落しているのは明らかである。また刀剣は地金の鍛え方によって様々な肌紋をみせることで知られるが、この史料から千代金丸が柾目作りの一振りであること

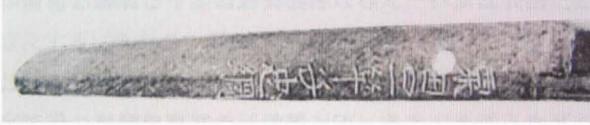
が解る。一体柾目の地肌は、地金を鍛えるにあたり、それを一方方向にのみ折り返したことによって生じるものであるとされる。種々の鍛錬法で打ち出された諸々の鍛え肌は、それぞれが織り成す模様の特徴を捉えて、柾目肌、板目肌、杢目肌、綾杉肌、梨地肌、小糠肌、ざんぐり肌などと呼ばれる¹⁷。因みに、日本では大和系鍛冶が手がけた刀剣に柾目作りのものが多くみられるという。

日本刀の刀身を特徴づける拵えの一つに鑄と呼ばれる部位が存在する。鑄とは、刀身の中央部に縦に伸びた一筋の稜線のことで、その存在により、日本刀の断面はその中央部あたりがやや丸みを帯びた形状を呈することになる。注目すべきことに、千代金丸の鐔に穿たれた孔の形状に鑄の存在を示す形跡は見当たらない。孔の形状から判断する限り、刀身の棟にあたる部分から刃に伸びる線は直線そのものであり、かかる直線上に鑄の存在を示すふくらみを帯びた部

位などは露ほども認めがたい。かように鑄の不在という観点からも、千代金丸を日本の太刀の一振りだとみなすことは憚られる。

【茎の拵えからみた千代金丸】

日本刀の茎は、その形状によって、普通形、雉子股形、振袖形、船底形、たなご腹形などと呼び分けられる。写真史料にみる茎は、普通形を踏襲した作りを伝えるもので、幕末の大老井



伊直弼ゆかりの刀剣粟田口一竿忠綱と銘された刀剣のそれである¹⁸。この史料が示すように、茎には作刀者の名が刻印されている。茎に作り手

の名を刻む慣習は、日本の刀鍛冶に特有のしきたりとして知られるもので、その歴史は平安時代にまで遡るものである。また茎には、その上に着せる柄の脱落を防ぐ方策として、鑿をかけることが行われる。かかる細工を反映する鑿目の筋模様は、流派ごとに異なる形状を呈するものとして知られる。

さて日本刀の茎をめぐるかかる特色を踏まえて、千代金丸の茎の特徴を検証してみる。下に



紹介する史料は、千代金丸の茎を写したものである。この史料にみる茎の容姿は種々の重要な特徴を顕現する。その一つは茎の長さであり、そのサイズはおおむね11cmと極端に短い。これにより千代金丸が片手で扱うことを念頭にして作刀された刀剣であることが判明する。よも

や鎌倉・南北朝期の日本の太刀に片手持ちの特徴を伝えるものなどは一振りもなからう。二つには、茎の二重構造があげられる。写真史料でも明白だが、刀身の棟区・刃区から茎の中心部よりの部分には、薄い金属板を着せ、それを鉾で打ち留めるといふ、独特の細工が施されている。勿論その表側には作り手の銘も刻されていない。かかる特殊な細工で知られる日本刀は他に存在しまい。さらには、目貫孔の数の多さやそのサイズといったものも異色の趣を醸し出す。史料が示すように、目貫孔は、茎の中央部に穿たれたものに加え、茎の突端にあたる部分にも大きく二つ穿たれている。紹介したこれらの特異な茎の拵えに彩られた刀剣は、古来数々の名刀が今に伝世する日本の刀剣界においても、千代金丸を除いては他に類をみないものであると判断される。

【樋のあしらいからみた千代金丸】

樋とは、刀の刀身部に線状に彫られた溝のことをいう。樋には、刃の方向に加わる圧力を吸収して刀身を曲がりにくくする働きがあるとされている。先行研究によれば、彫られた樋の形



状には刀鍛冶の癖が現れるといわれ、見所のひとつであるとされている¹⁹。ところで刀身に樋を施す原理は、元来日本の刀鍛冶の発見に負うものであったのであるろうか。それともそれは軍装品の伝播の

過程において大陸から持ち込まれた技術伝播の賜物であったのであろうか。この間に対しては、先行研究もいまだに明確な回答を示し得ていない。

さて、樋の起源をめぐる問題はひとまず避けることにして、左上にみえている千代金丸の刀身の写しを参照すれば、その棟部から刃縁にあたる箇所には、五本の細い線状の樋が彫られているのが確認される。これら5本の樋のうち、棟側の三本は22cm程度の長さにとめられ、一方、刃縁側の二本は長さがおよそ18cmとやや短めに整えられている。かかる工夫はいかなる力学的根拠を反映するものなのであろうか。その方面の知識に明るい専門家の見解を求めたいものである。先にも触れたように、歴代の日本刀にも樋を施したものは多々みられる。とはいえ、千代金丸の刀身に看取される樋の類は無二の形状を示すもので、日本の古刀期を代表する太刀の拵えにも類似のものは見出し難い。このように樋の系譜からみても、千代金丸は不可思議な出自に彩られている。

【目貫に着せた意匠からみた千代金丸】

下の写真史料は、千代金丸の柄の目貫とそれを飾る花紋の写しである。同様の花紋は、千代



金丸の鞘の鯉口及び鑑にもあしらわれている。花紋は、その花冠やつぼみ及び葉の容姿が示すように、然る菊科植物をモチーフにして打ち出されている。目貫に施された花紋には、それを手がけた金工細工師の打ち出しの技が冴え渡るが、目貫全体の造形が卵型の形状を示すことに関しては、美の表現手法の観点から注目されよう。一体アーモンド形

の限られた空間に植物のエッセンスを精緻に描き出そうとする手法は、元来西方のイラン文化圏で育まれた芸術様式でもある²⁰。千代金丸の目貫の容姿にかかるイラン芸術の要素が看取されることは、千代金丸の来歴の問題とも絡む重要な意味合いを孕んでいる。モンゴル・ウルスは、自らが征服した地域の職人たちを召集して王朝圏内の各地に送り込み、同王朝の産業育成の礎とした。周知の通り、宋・元期の江南地方には、およそ200年に渡り彼の地で活躍したペルシャ湾岸出自の回教集団もいた。彼らの居住区は蕃坊と呼ばれ、その域内では中東地域から導入された技術を駆使して種々の物品が生産されていた。後述するように、中世今帰仁勢力ゆかりの出土史料は、総じて元朝に仕えて江南地方に配置された西域出自の色目系騎馬軍団との関わりを傍証する特徴を孕んでいる。出土史料をめぐるかかる実態から推し量れば、千代金丸の目貫の製作を手がけた者の氏素性を問い質すにあたっては、元朝治下の色目系工房との関わりの視点から探りを入れることも要求されよう。ところで後醍醐天皇（1288-1339）といえば、13世紀後半期の東アジアにおける時代の空気を顕現した人物であったことで知られるが、この天皇を描いた肖像画には、元朝治下の中華大陸で文化行政において牽引的役割を演じたチベット仏教ゆかりの密教的要素がそこかしこにちりばめられているといわれる²¹。鎌倉・南北朝期の時代を彩る多くの文物は、モンゴル・ウルスの出現によってユーラシア大陸の域内で活発に展開された人と物の往来と表裏一体の関係にあるものようである。

【おわりに】

かつて攀安知が配下の武装集団を率いて起居した今帰仁城跡及びその周辺域からは、この勢



力にゆかりの麦の炭化粒、ギリシャ・ローマ様式に連なる左回転式の携行用石臼

²²、中世のモンゴル騎馬軍団との関わりが指摘される扁平の鍬及び携行用石製ヤスリ²³、白磁碗の内底に施されたスタンプ状マンジ紋²⁴、青花碗に描かれた中世キルギス族の騎馬武者像²⁵、ギリシャ趣味を髣髴とさせる十字紋²⁶、豹紋碗（土器に豹紋をあしらう風習は古代のイラン文化圏で発生）²⁷、サイコロと石駒（ササーン朝期のペルシャを起源とするナルドいわゆる双六が余暇の遊びであったことを証左する物証）²⁸、アラン族に特有の有翼獣との繋がりが指摘される異色の意匠をあしらった白磁碗²⁹、といったものがセットになって出土している。かかる出土物は、あまねくユーラシア大陸の騎馬文化との関わりを色濃く反映する特徴を孕んでいる。南宋を潰して江南地方に進出した元朝は、西域出自の諸部族を主力とする総勢14万人規模の騎馬軍団を長江のデルタ地帯周辺域に配置して、彼の地の経営と治安の維持を担わせた³⁰。この色目系防人軍団の中核には、トルコ系のキプチャク族を筆頭に元史に阿速の名で登場するアラン族なども名を連ねた。後者のアラン族は、つとに尚武の民として名を馳せた集団で、先達のスキタイ族やサルマタイ族の金工技術を継承していたことでも知られる。彼らの優れた金属加工技術は、時のモンゴル・ウルスにとっては不可欠なものであった。因みに鎖帷子の着用は、世界史上、サルマタイ族やアラン族に始まるとされるが、13世紀の中葉に中央アジアを旅したルブルクの見聞録には、1240年代以降のモンゴル騎馬兵士がアラン族の工房で製作された鎖帷子を身に纏っていたことが記されている³¹。ところでアラン族の集団内ではつとに軍神を奉る宗教が行われ、刀剣はその象徴として崇敬された。かかる宗教色を帯びた刀剣文化に支えられて作刀に励んだアラン族の刀工たちは、とりわけ軽騎兵装備に適した刀身の細い刀を作刀していたことで知られる。この項の冒頭に掲載した写真史料は、彼の世に知られたカフカズ出自のアラン刀の写しである³²。彎刀作りのその細身の刀身には、千代金丸の刀身を髣髴とさせる品位が感じられる。

上述において、中世今帰仁勢力ゆかりの出土史料は、すべからく元朝に仕えて江南地方に留め置かれた西域出自の色目系騎馬軍団との繋がりを色濃く反映するものであることを述べておいた。一体千代金丸はこれらの出土史料と表裏一体をなすかけがえのない文化遺産としての価値を有しているが、かかる視点から中世今帰仁の歴史を構築する営みは今日に至るまで成され



ていない。左の絵図は、チンギス・ハーン生誕800年を記念して、モンゴル国立歴史博物館がモンゴル・ウルスの兵器およびその戦術を紹介する目的で刊行した小冊子の表紙を飾る騎馬武者の像である³³。千代金丸が片手持ちのサーベルタイプの刀剣であることを鑑みれば、まさしくそれは13世紀から14世紀にかけて広くユーラシア大陸を席卷したモンゴル・ウルスの屋台骨となって活躍した騎馬武者にこそふさわしい刀であるとみなさざるを得ない。そもそも中世今帰仁勢力にゆかりの出土史料には西域出自の騎馬文化、キリスト教的色彩を帯びた十字紋、はたまたモンゴル軍団の

軍装備の流れを汲む種々の軍装品などがセットになって存在する。歴史的背景、民族、宗教、文化的性格の視点からこれらの出土史料と最も深い関係にある集団とえば、元朝配下の色目系騎馬軍団の中核にあって刀剣を軍神として崇め奉り、配属地の江南地方で武勇を馳せたアラン・キリスト教徒兵団を差し置いて他には見当たらない。千代金丸の来歴には依然として種々の謎がつきまとうが、この度の考察結果及び指摘した出土史料の内容に依拠するならば、千代金丸の前身は、元室が一方ならぬ信頼を寄せたアラン騎馬近衛兵団の千人隊長クラスの武人に佩用された、軍神の化身たる誉れ高きアラン刀であったとみなして差し支えなからう。

【注釈】

¹ ～中略 揮劍劈開石自刃 中略 有十字劈開之劍名千代金丸～と記してあり、追いつめられた攀安知がこの刀で頸動脈を掻ききって自害して果てたことが判る。蔡温、『中山世譜』、沖縄県教育委員会編、1986年、42頁。

² 出典『尚家継承美術工芸一琉球王家の美一』、那覇市市民文化部歴史資料室編、2002年、20頁。

³ 『尚家関係資料総合調査報告書II』、那覇市市民文化部歴史資料室編、2003年、105～106頁。

⁴ 『図説 日本刀大全』、新井邦弘編、学習研究社、2008年、33頁。

⁵ 新井編、前掲書、36頁。

⁶ 『尚家継承美術工芸一琉球王家の美一』、前掲書、20頁。

⁷ 新井編、前掲書、66～67頁。

⁸ 上間篤、「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」、『名桜大学紀要』12号、2006年参照。

⁹ 新井編、前掲書、66頁。

¹⁰ 新井編、前掲書、14～15頁。

¹¹ 新井編、前掲書、70～71頁。

¹² 上井弘、『正倉院』、小学館、1994年、74頁。新井、前掲書、31頁。

¹³ 牧秀彦、『名刀その由来と伝説』、光文社新書、2008年、29～31頁。新井、前掲書、31頁。

¹⁴ 杉山正明・北川誠一、『大モンゴルの時代』、中央公論社、1997年、282頁。

¹⁵ 因みに明朝との勘合貿易においては、10万振りに登る刀剣が日本から中国へ運ばれたといわれている。天田昭次、『鉄と日本刀』、慶友社、2005年、22頁参照。

¹⁶ 天田、前掲書、200頁。

¹⁷ 新井編、前掲書、135頁。

¹⁸ 新井編、前掲書、23頁。

¹⁹ 新井編、前掲書、135頁。

²⁰ Ali Dowlatshahi, *Persian Designs and Motifs for Artists and Craftsmen*, Dover Publications, Inc., New York, p. 10.

²¹ 杉山・北川、前掲書、271頁。

²² 上間篤、「攀安知とその家臣団の氏素性を探る」『名桜大学紀要』13号、2007年、2～3頁参照。

²³ 上間、前掲論文、8～10頁参照。

²⁴ 上間、前掲論文、4～7頁参照。

²⁵ 上間篤、「青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る」『名桜大学紀要』10・11号、2005年参照。

- ²⁶ 上間篤、「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」『名桜大学紀要』12号、2006年参照。
- ²⁷ R. Ghirshman, *IRAN*, Penguin, 1965, p. 36.
- ²⁸ 上間篤、「ナルドの東漸と西漸を考える」『イスパニア図書』第10号、2007年参照。
- ²⁹ 上間、前掲論文「攀安知とその家臣団の氏素性を探る」、14～21頁参照。
- ³⁰ 和田清、『支那官制發達史（上）』、中華民国法制研究会、1942年、366頁。
- ³¹ *The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253-55, as Narrated by Himself*. Trans. William Woodville Rockhill, London: The Hakluyt Society, 1900, p. 261.
- ³² 出展 В.А. КУЗНЕЦОВ, *АЛАНСКИЕ ПЛЕМЕНА СЕВЕРНОГО КАВКАЗА*, ИЗДАТЕЛЬСТВО АКАДЕМИИ НАУК СССР МОСКВА, 1962.
- ³³ *МОНГОЛ ЦЭРГИЙН ЗЭВСЭГ, ТЕХНИК*, Монголын Ундэсний Туухийн Музей, Улаанбаатар, 2006.

参考文献

- Dowlatshahi, Ali. *Persian Designs and Motifs for Artists and Craftsmen*. New York: Dover Publications, Inc., 1986.
- КУЗНЕЦОВ, В.А. *АЛАНСКИЕ ПЛЕМЕНА СЕВЕРНОГО КАВКАЗА*. ИЗДАТЕЛЬСТВО АКАДЕМИИ НАУК СССР МОСКВА, 1962.
- МОНГОЛ ЦЭРГИЙН ЗЭВСЭГ, ТЕХНИК*. Монголын Ундэсний Туухийн Музей, Улаанбаатар, 2006.
- Ghirshman, R. *IRAN*. Penguin, 1965.
- The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts of the World, 1253-55, as Narrated by Himself*. Trans. William Woodville Rockhill. London: The Hakluyt Society, 1900.
- 天田昭次 『鉄と日本刀』 慶友社 2005年
- 上間篤「青花碗に描かれた騎馬戦士の氏素性を探る」『名桜大学紀要』10・11号、2005年。
- 上間篤「青花皿にあしらわれた十字紋の氏素性を探る」『名桜大学紀要』12号、2006年。
- 上間篤「ナルドの東漸と西漸を考える」『イスパニア図書』第10号、2007年。
- 上間篤「攀安知とその家臣団の氏素性を探る」『名桜大学紀要』13号、2007年。
- 蔡温 『中山世譜』 沖縄県教育委員会編、1986年。
- 『尚家継承美術工芸—琉球王家の美—』 那覇市市民文化部歴史資料室編、2002年。
- 『尚家関係資料総合調査報告書II』 那覇市市民文化部歴史資料室編、2003年。
- 杉山正明・北川誠一 『大モンゴルの時代』 中央公論社、1997年。
- 『図説 日本刀大全』 新井邦弘編 学習研究社、2008年。
- 上井弘 『正倉院』 小学館、1994年。
- 牧秀彦 『名刀その由来と伝説』 光文社新書、2008年。
- 和田清 『支那官制發達史（上）』 中華民国法制研究会、1942年。